

ビルマ仏教の輪廻説

海 恵 宏 樹

I

ビルマ人の考へ方や感じ方、総じて文化の根底をなすものが上座仏教 (Theravāda Buddhism) であることは言うまでもない。しかし同じ上座仏教でもビルマのそれには可成り強い個性が見られる。一般に東南アジア諸国に行われる上座仏教の中、セイロンでは釈迦の教へを具体的に日常会話の形を用いて説いた「経 (Sutta)」に重点がおかれる。これはビルマ以外の他の国々についてもほぼ同様である。これに対しビルマではこの経のエッセンスと見做される諸原理・諸法則をまとめて体系化した「論 (Abhidhamma)」がその仏教の中心となっている。この論はその殆んどが一見無味乾燥な術語や法則の羅列であり、単なる思弁的遊戯の一種とすら解されがちである。その意味でビルマに於ける「論」の盛行を聞くと、我々はとかくビルマ仏教を観念的遊戯の色彩の強いものと考えがちである。しかしながら実状は決してそうではない。人々はこの体系化された教を、解脱への道を最も効果的に簡潔に示す教として、ひたすら実践の指針と仰いでいるのである。＜「経」は無知な大衆の為に仏陀が世間の言葉を用いて説いた、いわば通俗的な教である。これに反し「論」こそは仏陀がその教を真実の言葉で説かれたもので、高い理解力をもつエリートの為の教である＞というのがビルマ人の仏教理解の立場である。そこからして、＜ビルマの土地にこそ真の意味での仏説が弘められ実践されており、それを他の諸国——例えば日本の様に大乘仏教という真実ならざる仏教の行なわれている国——に弘めることが我々の使命である＞というビルマ人の意識もでてくる訳である。ともかくここでは、単なる抽象的教説としての仏説にでなく、最もリアルな仏説を奉じているという意識がみられる。「論」に対する態度は学的というよりは実践的である。「論」の教説は人間の世界観乃至人生観の形成に、その最深所に於て係り合っている、と言える。例えば、禪定 (Jhana) の教説は、その周到な実践の方法論によって心の鍊達を促進し、同時に後述の世界観の真実性に具体的な裏付けを与える。一見抽象的神秘的に見えるこの方法論に従って実践すれば、真摯に行う限り誰でも比較的容易に或程度の具体的成果が自己に内証される。この内証が更に仏説の真実性を確信せしめることとなり、多くのビルマ人の間に禪定の実践の盛行を招くに至っているのである。近時は更にこの方法を外人に伝播する運動すら盛んとなり、The International Meditation Centre を始め多くの禪センターが欧米の精神分析学者・精神病理学者等の注意を惹くに至っている。

しかし我々は本稿に於ては、禪定よりもより広い影響力をもっていると考えられるビルマ仏

教の輪廻転生説をみてゆくことにする。禪定の実践者は多いが、それはやはり比較的教育のある階層及び僧侶に限られる面があるが、輪廻転生説はこの様な教育ある層の人々にも無教育の人々にも、体系的な形或は通俗的な形で種々の程度の差はあっても、等しく彼等の世界観により一般的に影響していると言えるからである。

さてこの輪廻転生説、即ちどの様な世界が存在し、我々は現在何処に位置し、何を行えば何処に行くことになるのか、等の諸問題をやや体系的に扱うビルマ仏教の説として、我々は次の如き諸点を追って考察を進めることにする。それらの点はその形としては上座仏教一般に殆んど共通するが、その理解の仕方及び問題の追求度の強さはビルマ的特色の濃厚なものである。

- (1) 世界——広義の世界、或は物質的と精神的との両義を含んだ世界——の構造。
- (2) 心の型及び心の構成要素と認識の成立の構造。
- (3) 転生の具体相。
- (4) 無限なる再生の構造。

II

まず世界の構造を示すならば大略次の如くなる。

(A) 苦しみの世界

1. 地 獄 (Niraya)
2. 畜 生 界 (Tiracchāna-yoni)
3. 餓 鬼 界 (Peta-visaya)
4. 阿修羅衆 (Asūra-kāya)

(B) 快感の世界

1. 人 (Manussa)
2. 四 王 天 (Catumahārājikā)
3. 三十三天 (Tāvātimsā)
4. 夜 摩 天 (Yāmā)
5. 兜 率 天 (Tusitā)
6. 樂變化天 (Nimmānarati)
7. 他化自在天 (Paranimmittavasavattin)

(C) 色界（禪定界）

1. 第一段階の禪定界
 - ① 梵 衆 天 (Brahmapārisajjā)
 - ② 梵 輔 天 (Brahmapurohitā)
 - ③ 大 梵 天 (Mahābrahmā)
2. 第二段階の禪定界

- ① 少光天 (Parittābhā)
- ② 無量光天 (Appamāṇabhā)
- ③ 光音天 (Ābhassarā)
- 3. 第三段階の禪定界
 - ① 少淨天 (Parittasubhā)
 - ② 無量淨天 (Appamaṇasubhā)
 - ③ 遍淨天 (Subhakiṇṇā)
- 4. 第四段階の禪定界
 - ① 広果天 (Vehapphala)
 - ② 無想有情天 (Asaññasatta)
 - ③ 淨居天 (Suddhāvāsā)
 - (イ) 無煩天 (Avihā)
 - (ロ) 無熱天 (Atappā)
 - (ハ) 善相天 (Sudassī)
 - (ニ) 善見天 (Sudassā)
 - (ホ) 阿迦膩吒天 (Akanitthā)
- (D) 無色界 (高度の禪定界)
 - 1. 空無辺処地 (Ākāsānañcāyatanabhūmi)
 - 2. 識無辺処地 (Viññāṇañcāyatanabhūmi)
 - 3. 無所有処地 (Ākiñcaññāyatanabhūmi)
 - 4. 非想非非想処地 (Nevasaññānāsaññāyatanabhūmi)

以上を総計して31の世界を得る。これらの世界をどの様に理解すべきかは問題の残るところである。或人はこれらを外的に実在する世界と考え、他の人はこれらを象徴的な意味に於て考へる。又心理的現象の解釈として考へる人もある。しかし一般にビルマ人は、多くの知識階級を含めて、外的に実在する世界と考へている。この事は彼等、就中知識階級に近代的な科学的世界観や合理的思惟方法が欠けていることを直ちに意味するものではない。ただ仏陀の全智性への信仰、従って仏説への絶対信頼感が強すぎて、未だ近代的合理主義との対決が充分に意識に上って来ないと言ふべきであろう。科学的真理は最初から宗教的真理の下位に置かれているのである。更にかかる科学との対決以前という消極的側面だけでなく、宗教的真理の絶対性は彼等がその一部分を実際に自らの体験によって身証し得るだけに非常に強いものがあることに注意しなければならない。既に簡単に触れた様に、禪定の理論に従って真摯に実践すれば或程度まで実際にその理論に示される現象が実践者の身心に起る。この体験から推して、より進んだ段階で得らるべき超科学的事象——例えば空中を飛ぶとか過去世を想起するなど——も実践

の強度が増せば可能になると信ぜられてゆくのである。常識的立場からすれば部分をもって全体を計る危険性を感じしめるが、彼等ビルマ人にとっては仏説の絶対性を確立する強力な根拠となっているのである。

以上述べた事は知識階級にとっての仏教の世界観の問題性であるが、教育の乏しい大衆に於ては勿論この様な問題は存在しない。そこでは仏教の世界観は素朴な實在論の立場で受け入れられていると考えてよい。

次にどのような人間が、この31の世界の中どこへ転生・再生するのかという問題に移る為、我々は心の型の分析を知らねばならない。凡ゆる人間の問題はすべて基本的に心の問題として扱われるのが仏教の根本的立場だからである。

III

心 (Citta) とは、ビルマ仏教に於ては、我々の意識が活いている状態を言う。それはいつも何等かの対象と係り合っている意識のことである。この様な心は四グループに大別される。

- ① 欲界心 (Kāmāvacara-citta, 愛欲の支配下にある心)
- ② 色界心 (Rūpāvacara-citta, 禅定の段階にある心)
- ③ 無色界心 (Arūpāvacara-citta, 高度の禅定の段階にある心)
- ④ 出世間心 (Lokuttara-citta, 解脱の段階を示す心)

この中、前の三つは解脱に関係しない心、第四のみが解脱に関係する心とされる。①は我々通常の人間の日常生活に起る凡ゆる心を含むものとされる。②と③とは禅定の修業に熟達した人々のみ得ることのできる心であり、④は仏教的真理を体得した人々にのみ起る心である。

欲界心には善心 (kusala-citta) と悪心 (akusala-citta) とそのどちらにも属さない中性的な心 (avyakata-citta) との三グループがある。善・悪・中性を決定するのは心の構成要素 (cetasika) の組合わせである。亦、色界心、無色界心、出世間心の種々の心は凡て善心であるが、それらの中の相違も心の構成要素の組合わせの相違によって説明される。この心の構成要素は全部で52あり、凡ゆる型の心全部に共通して存在するもの7、大部分に存在するもの6、悪性のもの (欲 lobha, 慳 dosa, 痴 moha など) 14, 善性のもの (信 saddha, 慈 metta, 悲 karuṇā など) 25となっている。これらの構成要素の組合わせから次の如き89種の心の型が得られる。

まず欲界心のうち悪心は以下の12である。

1. 喜びを伴い、誤った見解を抱き、自発的に悪い行為を行う心。

例えば、他人が沢山物を所有している時はそれを奪うべきであるという誤った見解を抱き、自発的に富者の邸宅に忍び込み、嬉々としてその財物を盗み去る人の心がその例である。以下の七つの諸型もこれに準じて解し得るであろう。

2. 喜びを伴い、誤った見解を抱き、他発的 (即ち他人に唆かされて) 悪事を行う心。

3. 喜びを伴い、誤った見解なく、自発的…。
4. 喜びを伴い、誤った見解なく、他発的…。
5. 無感動で、誤った見解を抱き、自発的…。
6. 無感動で、誤った見解を抱き、他発的…。
7. 無感動で、誤った見解なく、自発的…。
8. 無感動で、誤った見解なく他発的…。
9. 悪意を伴い、怒りを有し、自発的…。
10. 悪意を伴い、怒りを有し、他発的…。
11. 無感動で、未決定な状態の心。
12. 無感動で、動乱し一定していない心。

次に欲界心の善心は24あるが基本的には次の8である。

1. 喜びを伴い、正しい見解を有し、自発的に善事を行う心。

例えば、仏陀に花や供物を捧げることが善いことであるという正しい見解を有し、喜びの気持をもって自発的にその行為を行う人の心がそれである。以下の七つの型もこれに準じて解し得るであろう。

2. 喜びを伴い、正しい見解を有し、他発的…。
3. 喜びを伴い、正しい見解なく、自発的…。
4. 喜びを伴い、正しい見解なく、他発的…。
5. 無感動で、正しい見解を有し、自発的…。
6. 無感動で、正しい見解を有し、他発的…。
7. 無感動で、正しい見解なく、自発的…。
8. 無感動で、正しい見解なく、他発的…。

以上の8善心に対応して、8つの「結果 (Vipāka 異熟) 心」と8つの「阿羅漢の心 (Kiriya-citta)」とがある。前者は後に説明されるであろう。後者 Kiriya-citta は阿羅漢の解脱位を得た人が、肉体的な死に至るまでこの世で生存する間に起す種々の心——但し悪心は絶対に起さない——を指す。解脱を得ていない普通の人々の心と型は同じであっても、根本的に執着をはなれた心であるから別扱いにされる。上述の善心の例でも、阿羅漢は同じ事を行ってもそれは何らの人間的感情を混えず、ただそれを行う機会であるからそれを行うというだけで、何らの功德を期待する等の事は全くないとされる。

以上の悪心と善心との他に、善悪に関していわば中立、全く係らない、或は善悪以前の心の型が18挙げられる。その中10箇 (dvi-pañcaviññāṇa) は我々の五つの感覚器官 (眼・耳・鼻・舌・身) で知覚が起る瞬間の心である。これはそれ自身では未だ何等の判断分別も加わらず、善悪に関係しないものであるが、例えば不快な光景を見た時はそれは前世の悪業の結果とさ

れ、快い光景を見た時は前世の善業の結果とされるから、五官のそれぞれについて2種の心が得られ合計10種となる訳である。通常の認識の場合この五官の知覚の後に対象を受入る刹那 (Sampaticchana) とそれを識別吟味する刹那 (Santirana) とが続き、これらにはそれぞれ五官の場合と同様に善悪二種の心が得られるので合計4種があり、特に後者 Santirana には特別の心が一つ加わるので総計5種えられる。以上の他に、対象が始めて五官にふれた刹那の心 (pañcadvārāvajjana), 心の感官にふれた刹那の心 (manodvārāvajjana), 阿羅漢の笑の心 (Hasituppada) の3種が加えられて、都合18種の中立的型の心がえられることになる。

次に色界心は禅定の段階に応じた心を示す。

- ① 第一段階の禅定の心。
- ② 第二 " "
- ③ 第三 " "
- ④ 第四 " "
- ⑤ 第五 " "

前述の欲界心の善心と同様にここでも以上の5色界心に対応して5つの結果心と5つの阿羅漢心とがあるので合計15となる。これらの禅定の段階の区別は、心の構成要素の組合わせの相違により説明される。禅定の主な構成要素は Vitakka (尋；対象の上に心をひたすら注ぐこと), Vicāra (伺；対象の上に心を持続的に止めおくこと), Piti (喜；以上の二つに成功して心の統一平静を保持した時に生ずる快感), Sukha (楽；心の安らぎ), Ekaggata (心一境性；心が完全に一点に集中していること) の5つである。禅定の第一段階ではこの5つが凡て現在しており、第二段階では Vitakka がなくなり——その必要がなくなった、即ち完全に心が対象の上に止めおかれるようになったので——、第三段階では Vicāra がなくなり、というように順次その数が少くなり、第五段階では Sukha も消えて、代りに Upekkhā (捨；完全な心の平衡状態) が入り、それと残りの Ekaggata がその構成要素となる。

無色界心はその主な構成要素は以上にのべた第五段階の Upekkhā と Ekaggata との二つであるが、その禅定の対象の相違によって4段階に分けられる。そしてこれらにも亦、「結果心」と「阿羅漢心」がそれぞれ対応して存在するので合計12の型の心がえられる。

- ① 空無辺処心
- ② 識無辺処心
- ③ 無所有処心
- ④ 非想非非想処心

以上が本質的に解脱と関係のない心の分類であり、総計81となる。最後に解脱の段階を示す心の型は4つあり、それに対応してその結果として享受される心があるので合計8つの型がえられる。前者はその段階に応じた解脱の得られる瞬間の心を取り出したもので、道心(magga-

citta) とよばれ、後者は果心 (phala-citta), とよばれる。

- ① 預流 (Sotāpanna 解脱へ至る流れに入った人) の心。
- ② 一來 (Sakadāgāmin. あと一回だけ再生する人) の心。
- ③ 不還 (Anāgāmin. これ以上再生しない人) の心。
- ④ 阿羅漢 (Arahat, 完全に解脱を得た人) の心。

これら四者の区別は 煩悩の 数をどれだけ減じたかによる。簡単に言えば、煩悩の数は10あり、Sotāpanna ではこの中 2つが断ぜられ、Sakadāgāmin では更に 3つの力が弱められる。Anāgāmin ではそれが断ぜられ、Arahat では残りの 5つも完全に断ぜられる。

既に明かな様に、以上の心の型の中、色界心と無色界心の諸型は先に述べた31の世界中の色界（禪定界）と無色界（高度の禪定界）に対応するものである。この世で色界心或は無色界心を得た人は、次の世でそれに対応する色界或は無色界に生れることになる。但し色界の区分は 4つで色界心の区分は 5つという不斉合がみられるが、これは第二と第三の禪定心の人と共に第二段階の禪定界に再生すると説明される。従って第四、第五の禪定心の人はいずれも第三、第四段階の禪定界に再生することになる。

欲界心も同様に欲界に再生するものであるが、色界や無色界の場合ほど明瞭には対応しない。原則的に言えば、12の悪心の人はいずれも苦しみの世界、即ち地獄・畜生界・餓鬼界・阿修羅衆のいずれか一つに再生する。善心の人はいずれも人間界以上の七つの快感の世界の一つに再生することになる。また出世間心は本来解脱に係る心であり、輪廻再生そのものを断ずる心であるが、阿羅漢に至らぬ限り Anāgāmin といえども再生を完全に免れることは出来ず、淨居天に再生する——この人間界には決して再生しないにも拘らず——と言われる。

我々は次にこのような再生・転生の具体的な構造を探ってみることにする。

IV

この具体的な構造を理解するに当り、幾つかの基本的原理を更に我々は考慮に入れなければならない。(i) 最初は知覚・認識の成立構造の解明である。(ii) 次に我々の心の二つの側面、即ち意識の状態 (Vithi-citta) と一種の潜在意識の状態 (Bhavanga-citta) とが明らかにされねばならぬ。(iii) 更にこの両者との関係において此世から次世への心の移り行きと両者の必然的關係が理解される必要がある。(iv) かかる背景において業 (Kamma) の輪廻に対する関係の意味がより鮮明とされねばならぬ。

(i) まず我々の知覚・認識の構造であるが、最初に、我々の心は仏教の無常 (anicca) という根本的原理によって一瞬一瞬生滅変化しているという考えが考慮に入れられねばならない。従ってどんなに長い認識でも凡て各刹那の認識の和で成立していることになる。そしてその最小単位の一刹那の認識が成立するためには17の階程が必要とされる。

- ① 一種の潜在意識の流れ (Atita-Bhavanga)

- ② その流れの動揺 (Bhavanga-calana)
- ③ その流れの中断 (Bhavangupaccheda)
- ④ 五官の触発 (Pañcadvārāvajjana)
- ⑤ 五官の知覚 (Pancaviññāṇa)
- ⑥ 対象の受容 (Sampaticchana)
- ⑦ 対象の吟味 (Santirana)
- ⑧ 対象の確定 (Votthapana)
- ⑨～⑮ 対象への反応 (Javana)
- ⑯～⑰ 対象の銘記 (Tadāḷambana)

最初の三つは一種の潜在意識内至無意識の心の流れが、何らかの認識を惹起させる外部の刺戟によって妨げられ途だえることを示している。第四はその刺戟の原因たる対象が五官のどれかと接触したが未だ何物とも判断分別されない瞬間を指している。第五はその対象が明確な表象として写し出される瞬間である。例えば赤い花が知覚されるとき、第四はただ何か物が存在するという事が五官の一つである眼によって把捉された瞬間であり、第五はそれが赤い花として知覚される瞬間である。しかしこの段階では未だ分別の力は活らいていない。第六はその対象を吟味しだす最初の瞬間とも言え、五官で捉えられた対象をそれとして心にしっかり受入れる瞬間である。第七はそれを精査吟味する瞬間、第八はその吟味された対象をそのものとして心におさめる瞬間である。第九～第十五の七つはその対象に我々が煩惱の支配下にあって関係する諸瞬間である。例えばこの赤い花を盗もうとか、病める友に贈って元気づけてやろうとかいった心が活らく瞬間である。その後、そういう形で我々の心の活らきで捉えられた対象が第十六と第十七番目の瞬間に心に銘記される。これをもって我々の知覚・認識の最小の一刹那は完了し、十八番目の瞬間には再び Bhavanga なる一種の潜在意識に一旦帰ることになる。その後再び前述の如き17の瞬間から成る最小単位の知覚・認識が続く。一見如何に連続した知覚・認識のように見えても、禪定に於けるそれを除いては必ずこの様に一旦 Bhavanga に帰ってから次の認識へと移っている訳である。それは恰もランナーが如何に速く走ろうとも必ずその間に自分の足を大地に下して前進するようなもの、或は、一見連続して光っている電球の明りが実際には50乃至60回も一秒間に明滅しているのにとえられる。

さてこの Bhavanga を構成するのが、我々が前に説明を保留した結果心 (Vipāka-citta) である。この場合の結果心は欲界で10 (2 santirana + 8 善心結果心)、色界心5、無色界心4の合計19である。この結果心は、その構成要素は既述の如き善悪いずれかの能動的な心と同じであるが、能動的な心の後で、いわばその型として残る心であり能動的には活らかない。その力は非常に弱く、業 (Kamma) を作ることはない。かかる受動的な結果心は現実の知覚・認識の中においてもよくその特性を示している。前述の17瞬間から成る知覚・認識の最小単位

において第9～第15の七つの能動的心を除いた残り凡ての瞬間は極めて心の活らきが弱く、第4と第8の心以外は凡て結果心によって占められているのである。ではかかる結果心が構成する Bhavanga とは何であろうか。

(ii) Bhavanga は Life-continuum と訳されるが、直接には我々の心が外的或は内的に如何なる対象をも持たず、全くの静止平衡状態にある時である。例えば夢一つみないで深い眠りの中にある心がそれである。従って我々が覚めており、意識状態にある限りそれを自覚することは出来ない。知覚・認識の最小単位間に介在する Bhavanga は如何にも自覚されそうに見えるが、これは非常に微細な点で超自然的神通力 (Abhiññā) を得た時のみそれを知りうるといわれる。ところで、人は母の胎内に生を享けた瞬間から死の瞬間までこの Bhavanga によって生きている——その意味でこれは生命そのものを意味するとも考えうる——が、生を享けた瞬間の Bhavanga-citta を特に名づけて Paṭisandhi-citta (再生心)、死の瞬間のそれを Cūti-citta (死滅心) としている。この Paṭisandhi-, Bhavanga-, Cūti-citta の対象は過去の生の中での出来事から得られる。我々が死ぬ瞬間の意識、即ち Cūti-citta の直前の心 (Vīthi-citta) には大体次の様な対象が現われると信じられている。

①死の直前にその人がなした行為が特に強い印象を齎らす場合はそれが対象として浮んでくる。

②しかし彼が一生の中に何か非常に強烈な印象を惹起す行為を行っていたならば、それが現われる。人殺しをした事などがその例となる。

③以上のいずれもない場合は、彼が一生の間習慣的に行っていた事柄が浮び上ってくる。善悪いずれにも属さない様な事柄である。

④更にこの三つのどれも起らない場合には、ずっと過去世の——我々の存在は無限の過去から輪廻再生しつづけているのであるから——出来事が浮んでくる。

①の場合は死の直接の行為そのものが対象として表象されるが、他の三つの場合は凡て過去のことであるから、その出来事の極立った特徴が死の直前の意識に上る。例えば人殺しの時の血痕の色、叫び声などである。もしこの様な表象も現われない場合には、第三の事例として、自分が再生する次の世に於ける自分の運命 (Gati) が浮んでくる。これは過去における自分の業 (Kamma) によって自分がうけるべき結果としての運命の表象であるから、業の因果説に支えられていることは言うまでもない。この第三の場合が普通人にあっては最も多いと見るべきであろう。この様な死の直接の意識 (vīthi-citta) の対象がそのまま次の世の Paṭisandhi-citta の対象となり Bhavanga-, Cūti-citta として続いてゆく訳である。それ故、死の直前の意識の対象が好ましいものになるためにも人々は善業を積む必要があるといえる。前に述べた第三の場合、即ち次世に於ける自分の運命が浮んでくる場合、この表象は死の直前よりも少し前に起ってくる場合もあるということで、他の人々がそれに気づいてその表象を好ましいもの

に変えてやる事がすすめられたりする。現在でもビルマ社会では死にゆく人の枕頭に親類友人などが集まり、その人の一生における善業を口々に語り告げて見守る習慣ありと言われるのは、以上の如き考え方に根ざしているものであろう。善業を思い出させる事により、死にゆく人の来世に於ける Paṭisandhi-citta を少しでも良いものにしてやろうという思いやりの表われと考えられる。

(iii) 上来のべたところにより、現世の心と次世の心との関連性の大要は示された。次に現世のどういう心が、いかなる結果心として次世の Paṭisandhi-citta になるかを簡単にみておこう。まず欲界心の悪心であるが、これは前述の18の中性的心の中、悪業の結果としての Santirana-citta となって Paṭisandhi を作る。次に欲界心善心は、それぞれ対応する結果心 (vipāka-citta) として Paṭisandhi になる。この事は色界心と無色界心とについても同様である。欲界心の悪心については詳細な規定は見られないが、善心及び色界心・無色界心については次の様な規定が見られる。我々の心の構成要素の中、欲 (lobha)、瞋 (dosa)、痴 (moha) という悪心の三要素及び無欲 (alobha)、無瞋 (adosa)、無痴 (amoha) という善心の三要素がその力の強さがすぐれていることから因 (hetu) とよばれる。ところで欲界心の善心について言えば、善心の構成要素が二つである型の心——「正しい見解なき」4つの型の心——の人は人間として再生はするが啞や盲人など不具者となって生れる。善心の三要素を有する心——「正しい見解を有する」4つの型の心——の人は人間以上の7つの世界のいずれかに再生する。色界と無色界とに関しては、それぞれの段階が無色界の最高である浄居天を除きいずれも三つに細分されるが、これはそれぞれの禅定の段階における禅定心の程度の軽、中、強に従って再生する世界が少しずつ異なることを示すものである。しかしこの種の説明は悪心の場合や浄居天の五細分等について詳しく触れていない。

更にこの様な因果関係をもって起る死と生とは一瞬の間隙もなく連続すると考えられている。今Aなる人が死ぬ瞬間にBなる人が誰かの胎内で生をうけることになる。その意味で、再生は一人の人間の心を次世の存在に再び結びつける——Paṭisandhi (Relinking)——ことに他ならない。但し、その心は靈魂といった不変の実体的なものと考えるてはならない。一切の実体的な我 (ātman) を否定するのが仏教の基本的立場だからである。ところで、この様な再生の考え方は、人は阿羅漢の解脱位を得ない限り次世もその次の世もどこまでも再生しつづけてゆくという輪廻の一般的観念に理論的肉付けを与えるものである。そこから、現今ビルマ人の考え方にも見られるところであるが、此世で生を喪うことは余り大きな意義をもって考えられない。死は長い輪廻の一つの接続点を経過したという意味しか持たないからである。従って人間の生命の尊厳といった観念も出てきにくい。死はその人の業 (Kamma) の結果として起るものとされ、人為的な面は見失われるからである。

(iv) これまでは主として心の型の面から輪廻再生の構造を考察してきたが、通常輪廻説とす

ぐ結びつけられる業 (Kamma) も根本的にこの心の型の問題として考えられる。業はその活らく場所により、身業 (身体による行為)、口業 (口による行為、即ち言葉)、意業 (心による行為、即ち観念・思想) に三分されるが、根本的にはいずれも心を基にして成立っているのであり、心の表現に他ならない。その意味で業と輪廻との関係は、前来のべてきた心の型による再生の構造の解明に尽きるのである。ただ若干の補足をここで加えるのみに止める。

既述の17瞬間からなる知覚・認識の最少単位の中、業はその第9～第15瞬間の Javana において形成される。この7瞬間に於て各人はそれ以前の8瞬間において受動的に受入れた対象に能動的に自分の性に従って働らきかけ関係する。この Javana において活動する心の型は29あげられる。即ち欲界心の悪心12、善心16 (普通人8 + 阿羅漢8)、及び中性的型の心としての阿羅漢の笑1とである。因みに色界心や無色界心はこの様な Bhavanga の谷間をはさんで続く知覚・認識とは異なり、禅定力の故に一樣に連続した心の流れの中にあり、その業は意業のみである。普通人の Javana の段階では身業・口業・意業凡てがあり得る。

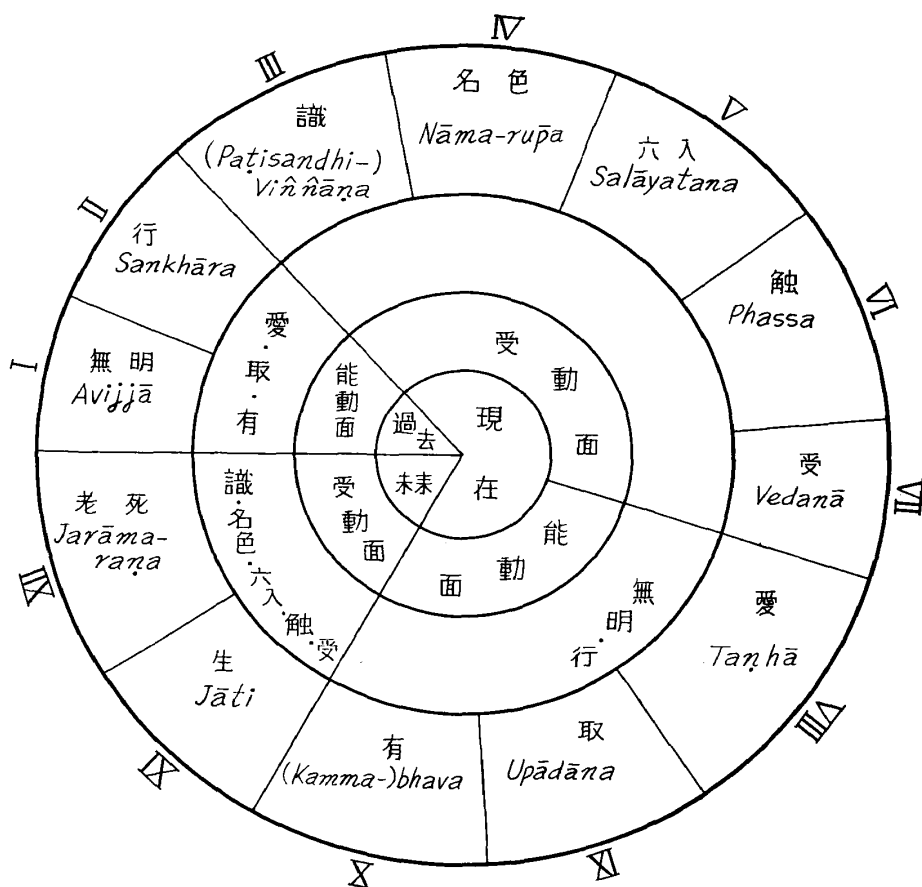
一人の人間でも一生の中、善業悪業とりまぜて種々行うことは当然であるが、その場合の結果について詳細な説明は見出し難い。しかし既述の様に、Cūṭi-citta の直前の意識 (Vithi-citta) に現われるのはその生涯中の最も強い業或はその業の特徴であるから、結局は業の強さ、従って心の構成要素の組合せにより決定されると思われる。論典には善心の場合について同様の問いがなされるが、そこで示されるのは、一人の人間が生涯中に欲界、色界、無色界に亘って善業をつんだ場合には、死の直前の意識にはそのいずれかが現前する、ということのみである。しかし一般的に言えば、悪心と善心の場合は因 (hetu) の数が強さを決定する訳であるから、二因しか伴わない悪心よりも二内至三因を伴う善心の方が強く、特に禅定心は凡て三因を伴う善心であり非常に強いと考えられる。しかし我々はこの問題にこれ以上立入ることは出来ない。

V

仏教の恐らく最も根本的な教義と思われる縁起説 (paṭiccasamuppāda, Dependent Origination) は、上座仏教では前述の様な人間の輪廻の無限なる様相を説明する理論として解釈されている。縁起説は12の構成分子からなり、無明一行一識一名色一六入一触一受一愛一取一有一生一老死等、であるが、この中最初の無明と行との二つは過去に、最後の二つ生と老死等とは未来に配分される。中間の八つの分子、識一名色一六入一触一受一愛一取一有が現在に配分される。そして、無明一行という時には、無明は必然的に愛と取を伴い、行と業 (Kamma) とは不離であるから、結局そこに無明、行、愛、取、有 (有は Kamma が生じてくること Kamma-becoming と解釈される) の五つの分子が存在することになる。現在に属する五つの中、識 (viññāṇa) は母の胎内に生をうけた瞬間の意識であり、我々がすでに見てきた Paṭisandhi と解釈されている。そして現在の八分子は、識一名色一六入一触一受の五つと、残りの三つ愛

一取一有との二群に分けられる。前者は現在の世における受動的な面、後者の三つは現在の世における能動的な面、即ち業を造ってゆく面の心を表わしている。過去世の無明一行で暗黙の中に愛一取一有が含まれていた様に、ここでも愛一取一有は当然無明一行をも含むものとされる。かくて現在の世の能動的な面の心も五つの分子を有することになる。未来世の生 (Jāti) に必然的に識一名色一六入一触一受の五つが伴うと解釈されている。けだし、識は前述の如く Paṭisandhi-citta であり、その Paṭisandhi-citta はその構成要素たる名 (nāma) と、業から生ずる色 (rūpa) なしには存在し得ないからである。そしてこれらが具備された時、六つの感覚器官 (六入) が生じ、触一受の作用が行われる。老死等は生と必ず随伴することを示す為に附加されているにすぎない。この様にして未来世にも亦、五つの分子が得られることになる。

この過去・現在・未来の三時世には、受動的な面と能動的な面との両方があり、前者はそれぞれ過去の業の結果 (vipāka) であって識一名色一六入一触一受の一列で表わされる。後者はそれぞれの世で業を造ってゆく面を表わし、無明・行・愛・取・有の一群で示される。かくて、過去世の業 (即ち無明・行・愛・取・有) によって現在の世に生を享け (paṭisandhi), 過去世の業によって制約された感覚器官や身体を有して (既述の如く啞・盲人等は過去世の業の



(この図では過去に於ける受動面、未来における能動面が示されていないが、現在の構成と全く同様に解すべきである。)

結果である)、触・受などの形で対象との接触が始まる。この現世における受動面に続いて、能動的に業を造る過程が愛・取・有・無明・行の一群によって対象との積極的な関係として示される。その業の結果として、それに制約された在り方が未来世に識一名色一六入一触一受という一群の結果をもって生ずる。輪廻転生とはこの様な生の繰り返しが無限に続くことに他ならない。

この様な輪廻は根本的には無明、即ち釈迦によって示された真理に対する我々の無知から起っているのです、その無明を除くことが仏道修業の中心となる。その具体的方法がビルマに於いては種々の独創的な考案を混へた坐禅の普及となり、多くの人々の心を捉えているのである。

参 考 文 献

S.Z. Aung & C.A.F. Rhys Davids: Compendium of Philosophy. Pali Text Society, London, 1910.

Harvard Oriental Series Vol.41: Visuddhimagga of Buddhaghosacariya. 1950.

Ledi Sayadaw: Bodhipakkhiyadipani. Buddha Sasana Council, Burma, 1960.

U Ba Khin: What Buddhism is. Vipassana Research Association, Burma, 1951.

U Hpe Aung: Selected Lectures and Papers on Buddhism. Nos.1-3. Burma. 1957~1959.